

8/7：四国では大雨はいつ降るか？大雨が降るとどこでどのようなことが起こるのか？

2-1 日本の水害

2-2 世界の降水量分布

2-3 四国の降水量分布

2-4 沖積平野の地形

2-5 洪水ハザードマップ

2-1 日本の水害

・水害の種類

自然災害は様々な原因によって引き起こされ、火山活動や地震など地下に原因があるものだけではなく、大雨や豪雪、強風、低温、雷といった気象に原因があるものもある。これら気象に起因した自然災害の中で、河川の氾濫、土砂崩れ、高潮などの水に関わる災害を水害と呼ぶ。

・水害の発生時期

次ページの表 5 は、1989 年（平成元年）から 2010 年（平成 22 年）にかけて発生した水害を示したものである。この表から、水害が発生した月とその原因を読み取って、表 2 と表 3 を作成し、水害はいつ、どのような原因で発生するのかを読み取る。月や原因が複数にまたがる場合は両方に数える。

表 3 水害が発生した月

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
水害の 回数												

表 4 水害の原因

原因	水害の回数
台風	
梅雨前線	
低気圧（台風以外）	
前線（梅雨前線以外）	

2-2 世界の降水量分布

・降水の原因

大気中の水蒸気が雨粒になって落ちてくることが降水の原因で、大気中の水蒸気が雨粒になる条件には以下の 2 つがある。1 つは土の粒子や煤煙、海塩などの核があることで、もう 1 つは水蒸気が飽和に達することである。水蒸気が飽和に達する条件は、大気中に水蒸気が豊富にあり、そしてその空気塊の温度が低下することで、これは、温度が低いほど空気中に含むことができる水蒸気の量が少ないためである。

大気中に水蒸気が豊富にある条件としては、海洋からの水蒸気の供給が盛んであることがあげられる。このため、海から距離が近いほど雨は降りやすく、内陸ほど少なくなりやすい。一方、空気塊の温度が低下する条件としては、空気塊の上昇があげられる。これは、標高が高くなると大気圧が低下し、温度が低下するためである。空気塊の上昇は、対流、低気圧、前線、地形とともなって生じ、それらは山地などの地形的な条件で促進される。

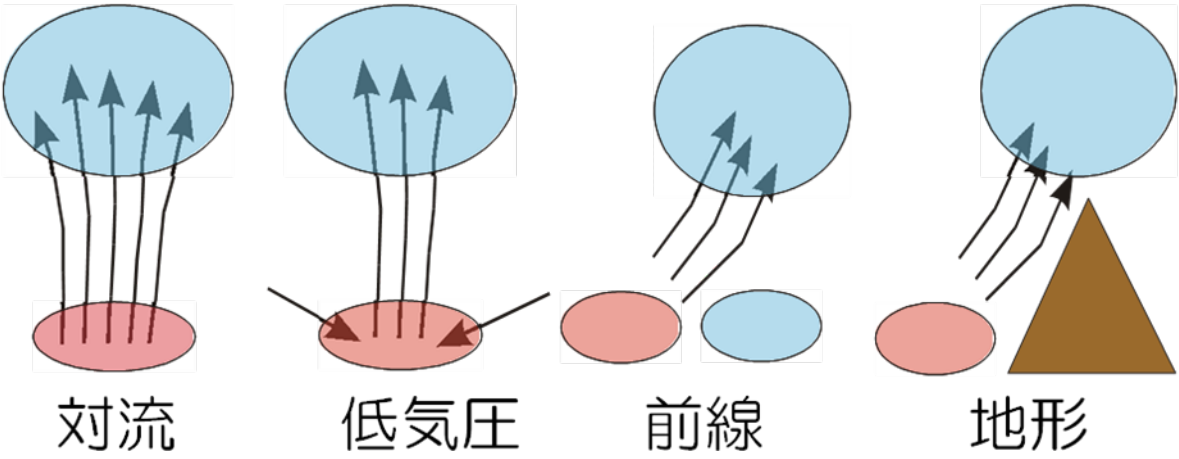


図 19 空気塊の上昇を表す模式図

・世界の降水量分布

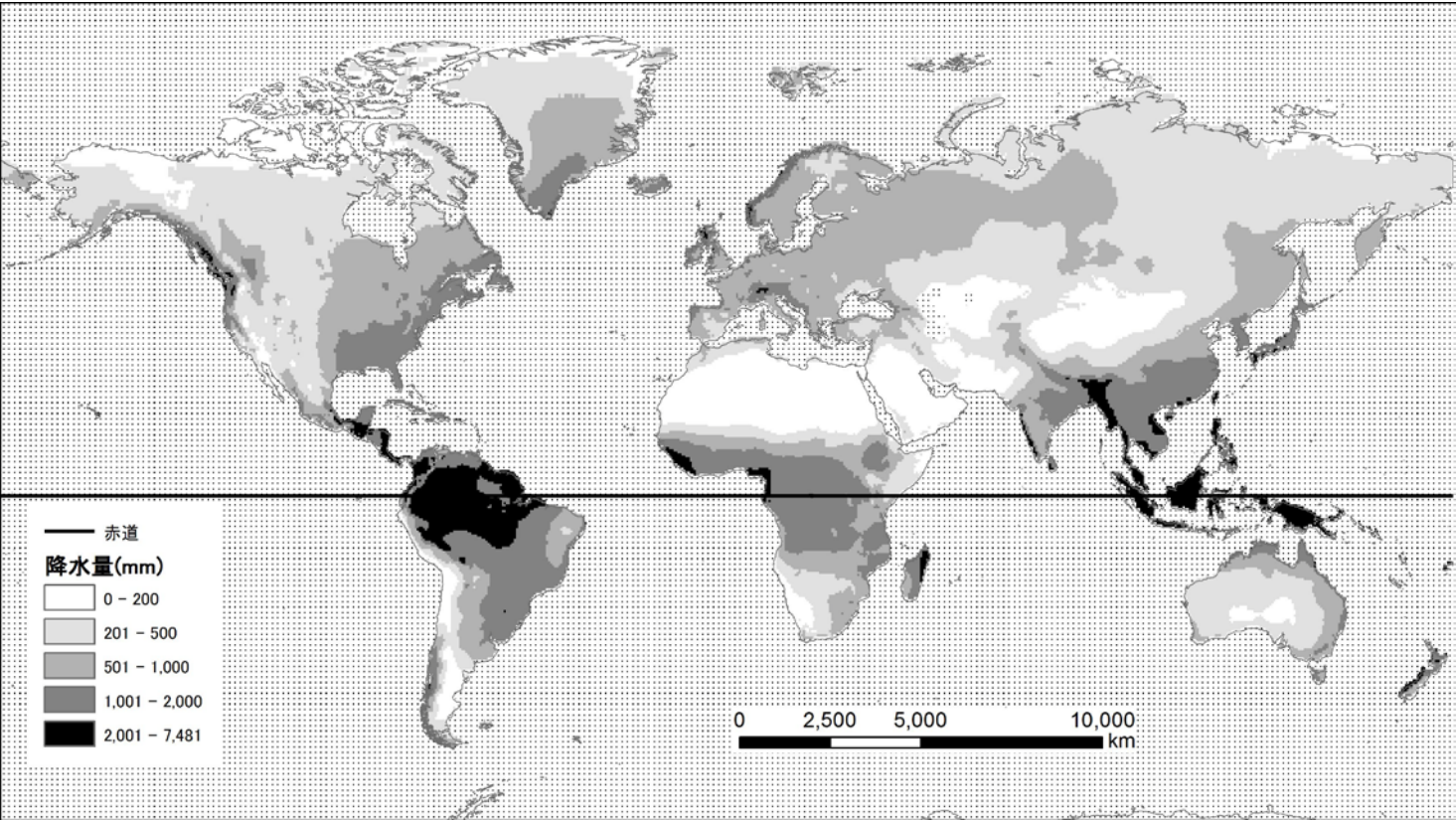


図 20 世界の降水量分布

表 5 平成元年から 22 年にかけて災害をもたらした気象事例
気象庁 HP「災害をもたらした気象事例（平成元年～本年）」により作成

	期間	概要
平成22年（2010年）		
前線による大雨	10月18日～10月21日	奄美地方で大雨。
梅雨前線による大雨	7月10日～7月16日	西日本から東日本にかけて大雨。
平成21年（2009年）		
台風第18号による暴風・大雨	10月6日～10月9日	沖縄地方から北海道の広い範囲で暴風・大雨。
熱帯低気圧・台風第9号による大雨	8月8日～8月11日	九州から東北地方の広い範囲で大雨。
平成21年7月中国・九州北部豪雨（梅雨前線）	7月19日～7月26日	九州北部・中国・四国地方などで大雨。
平成20年（2008年）		
平成20年8月末豪雨（低気圧、前線）	8月26日～8月31日	愛知県を中心に東海・関東・中国および東北地方などで記録的
大気の状態不安定による大雨	8月4日～8月9日	関東甲信・東海・近畿・四国・九州地方を中心に大雨。
大気の状態不安定による大雨と突風	7月27日～7月29日	中国・近畿・北陸・東北地方を中心に大雨。
平成19年（2007年）		
秋雨前線による大雨	9月15日～9月18日	岩手県、秋田県、青森県の各地で大雨。
台風第9号	9月5日～9月9日	東海から北海道にかけて大雨、暴風。
台風第4号と梅雨前線による大雨と暴風	7月1日～7月17日	沖縄から東南北部の太平洋側にかけての広い範囲で大雨。沖縄、西日本の太平洋側と伊豆諸島で暴風。
低気圧による暴風、高波、大雪	1月6日～1月9日	西日本から北日本の広い範囲で暴風や高波および大雪。
平成18年（2006年）		
低気圧による暴風と大雨	10月4日～10月9日	近畿から北海道にかけて暴風や大雨。各地で海難事故や山岳遭難が発生。
台風第13号	9月15日～9月20日	沖縄地方、九州地方、中国地方で暴風、大雨。宮崎県では竜巻により死者が発生。
平成18年7月豪雨（梅雨前線）	7月15日～7月24日	長野県、鹿児島県を中心に九州、山陰、近畿、北陸地方の広い範囲で大雨。
梅雨前線による大雨	6月21日～6月28日	熊本県を中心に西日本で大雨。
平成17年（2005年）		
台風第14号、前線	9月3日～9月8日	4日夜、東京都と埼玉県で局地的に1時間に100ミリを超える猛烈な雨。
台風第11号	8月24日～8月26日	関東地方南部と伊豆地方を中心に大雨。
梅雨前線による大雨	7月8日～7月10日	九州地方や東海地方で激しい雨。
梅雨前線による大雨	7月1日～7月6日	西日本と中部地方で記録的な大雨。
梅雨前線による大雨	6月8日	新潟県を中心に北陸地方で大雨。
平成16年（2004年）		
台風第23号、前線	10月18日～10月21日	広い範囲で大雨。土砂崩れや浸水等により甚大な被害。
台風第22号、前線	10月7日～10月9日	台風の中心付近では猛烈な雨や風。静岡県石廊崎で最大瞬間風速67.6m/s。
台風第21号、秋雨前線	9月25日～9月30日	三重県では1時間に130mmを超える猛烈な雨。尾鷲の日降水量740.5mm。
台風第18号	9月4日～9月8日	沖縄地方から北海道地方にかけて、各地で猛烈な風。広島で最大瞬間風速60.2m/s、札幌で50.2m/s。
台風第16号	8月27日～8月31日	高松港、宇野港などで観測開始以来最も高い潮位を観測。瀬戸内中心に高潮被害顕著。
台風第15号、前線	8月17日～8月20日	四国地方や九州地方などで非常に激しい雨。日本海側の各地で、台風接近時を中心に暴風。
台風第10・11号	7月29日～8月6日	相次いで四国に上陸。徳島県で、これまでの日本の記録を上回る日降水量1317mm。
平成16年7月福井豪雨（梅雨前線）	7月17日～7月18日	福井県や岐阜県で大雨。福井県美山では1日で平年の月降水量を上回る降水量。
平成16年7月新潟・福島豪雨(梅雨前線)	7月12日～7月14日	新潟県中越地方や福島県会津地方で記録的な大雨。台風接近・通過時を中心に暴風。九州地方から東海地方にかけての太平洋側で300mmを超える大雨。
台風第6号	6月18日～6月22日	台風接近・通過時を中心に暴風。九州地方から東海地方にかけての太平洋側で300mmを超える大雨。
平成15年（2003年）		
台風第14号	9月10日～9月14日	猛烈な勢力で宮古島を通過。宮古島で最大瞬間風速74.1 m/s。
台風第10号	8月7日～8月10日	日本列島を縦断。全国で大雨、西日本で暴風。室戸岬で最大瞬間風速69.2m/s。
前線、低気圧	7月18日～7月21日	梅雨前線が日本海に停滞。九州北部で1時間50mmを超える非常に激しい雨。
平成14年（2002年）		
台風第21号	9月30日～10月3日	関東南部に上陸し、北日本を縦断。関東から北日本の太平洋側で暴風。静岡県石廊崎で最大瞬間風速53.0m/s。
台風第6号、梅雨前線	7月8日～7月12日	房総半島上陸。中部地方から東北地方で大雨、関東南部で暴風。岐阜県根尾村で日降水量495mm、八丈島で最大瞬間風速
平成13年（2001年）		
台風第16号	9月6日～9月13日	沖縄近海で複雑な動き。久米島で最大瞬間風速50.8m/s、期間降水量967.5mmの記録的な大雨。
台風第15号	9月8日～9月12日	関東南部に上陸、東海から関東山沿いを中心に大雨。栃木県奥日光で期間降水量895mm。
前線、低気圧	9月2日～9月7日	九州南部から四国で1時間100mmを超える猛烈な雨。
台風第11号	8月20日～8月22日	紀伊半島南部に上陸、東日本を中心に大雨。三重県尾鷲で日降水量549mm、和歌山県潮岬で最大瞬間風速38.2m/s。
梅雨前線	7月11日～7月13日	梅雨前線が日本海に停滞。九州北部で1時間50mmを超える非常に激しい雨。

	期間	概要
平成12年（2000年）		
停滞前線、台風第14・15・17号	9月8日～9月17日	東海地方で記録的な大雨、7万棟が浸水。名古屋市で日降水量428mm。
大気の状態不安定、台風第3号	7月3日～7月9日	伊豆諸島で暴風、関東から北海道の太平洋側で大雨。八丈島で最大瞬間風速49.3m/s。
平成11年（1999年）		
低気圧	10月27日～10月28日	低気圧が本州南岸で急速に発達。千葉県佐原市で1時間153mmの記録的な大雨。
台風第18号	9月21日～9月25日	熊本県に上陸。熊本県で顕著な高潮被害。南西諸島・九州・中国地方で猛烈な風、中部地方で大雨、愛知県で竜巻発生。
前線、台風第16号	9月14日～9月16日	九州南部に上陸後、四国から本州中部へ。岐阜県で長良川が氾
熱帯低気圧	8月13日～8月16日	関東地方中心に大雨、神奈川県玄倉川で人的被害。
梅雨前線、低気圧	6月23日～7月3日	西日本で激しい雨。福岡市で地下街に浸水害、広島県で土砂災
平成10年（1998年）		
前線、台風第10号	10月15日～10月18日	九州南部に上陸、西日本縦断。和歌山で最大瞬間風速
前線	9月23日～9月25日	高知県で記録的な大雨。高知で1時間129.5mmの猛烈な雨。
台風第8・7号	9月20日～9月23日	台風第8号、第7号が2日連続して近畿地方に上陸。三重県上野で最大瞬間風速56.4m/s。
台風第5号	9月15日～9月17日	静岡県に上陸後、北日本を縦断。関東で暴風、東日本から北日本で大雨。千葉県銚子で最大瞬間風速45.7m/s、北海道広尾で日降水量346mm。
前線、台風第4号	8月26日～8月31日	栃木県北部から福島県にかけて記録的な大雨(平成10年8月末豪雨)。栃木県那須町で日降水量607mm。
梅雨前線	8月3日～8月7日	新潟県(下越、佐渡)で記録的な大雨(平成10年8月上旬豪雨)。新潟で日降水量265mm。
平成9年（1997年）		
台風第19号	9月13日～9月17日	九州南部に上陸、九州南部や四国で暴風。西日本から中部地方の太平洋側で大雨。宮崎県えびの市で日降水量688mm。
前線、台風第11号	8月3日～8月13日	九州・四国地方や北海道などで大雨。長崎県平戸で期間降水量708mm。
台風第9号	7月24日～7月29日	四国東部に上陸、四国地方を横断、四国から東海地方にかけて暴風や大雨。室戸岬で最大瞬間風速52.2m/s、奈良県上北山村で日降水量734mm。
梅雨前線、低気圧	7月1日～7月17日	西日本から中部地方で大雨、鹿児島県出水市で土石流被害。熊本県旭志村で期間降水量1、495mm。
台風第8号	6月26日～6月29日	九州北部に上陸後、本州を縦断。九州北部・中国・四国地方で大雨。鳥取県鹿野町で日降水量311mm。
平成8年（1996年）		
台風第17号	9月21日～9月23日	房総半島沖を北東進、関東南部や伊豆諸島で暴風雨。銚子で最大瞬間風速51.9m/s、東京都新島で期間降水量が391mm。
台風第12号	8月11日～8月15日	熊本県に上陸し、日本海を経て東北へ。南西諸島から西日本で猛烈な風、鹿児島で最大瞬間風速58.5m/s。
前線、大気の状態が不安定	7月3日～7月4日	熊本・宮崎県で短時間強雨。山形・宮城県で落雷。
平成7年（1995年）		
前線、台風第12号	9月16日～9月17日	伊豆諸島・千葉県で暴風雨。三宅島で最大瞬間風速55.4m/s以上、千葉県勝浦で日降水量232mm。
前線、大気の状態が不安定	8月9日～8月11日	前線が日本海から本州南岸へ南下、山形・新潟・鹿児島県で大雨。鹿児島で1時間104.5mm。
梅雨前線	6月30日～7月22日	信越地方を中心に甚大な被害。
平成6年（1994年）		
台風第26号	9月28日～9月30日	和歌山県南部に上陸し本州横断。紀伊半島で暴風雨。三重県津で最大瞬間風速48.7m/s、奈良県上北山村で日降水量733mm。
寒冷低気圧	9月22日～9月24日	仙台市を中心に大雨、日降水量147mm。
大気の状態が不安定、寒冷前線	9月2日～9月8日	大阪府北部から兵庫県南東部で局地的大雨。大阪府豊中市で1時間91mm。
平成5年（1993年）		
台風第13号	9月1日～9月5日	非常に強い勢力で九州南部に上陸。種子島で最大瞬間風速59.1m/s、宮崎県日之影町で日降水量540mm。
梅雨前線、台風第7・11号 ※	7月31日～8月29日	九州南部を中心に甚大な被害。平成5年(1993年)8月豪雨
台風第5・6号	7月26日～7月30日	台風第5号、第6号相次いで九州へ上陸。
梅雨前線、台風第4号	5月13日～7月25日	前線の活動が長期間活発、台風第4号四国に上陸。九州南部で年間降水量に匹敵する大雨。
平成4年（1992年）		
台風第10号	8月6日～8月9日	熊本県に上陸後、中国地方を経て日本海へ。温帯低気圧に変わり北日本でも大雨。
平成3年（1991年）		
前線、台風第17、18、19号	9月12日～9月28日	台風が相次いで日本に上陸・接近。台風第19号の暴風による死者多数。
梅雨前線	6月2日～8月8日	梅雨前線の活動が長期間活発、各地に被害。
平成2年（1990年）		
前線、台風第20号	9月26日～10月1日	台風が和歌山県に上陸。九州から関東の太平洋側で大雨。
前線、台風第19号	9月11日～9月20日	台風が和歌山県に上陸し、本州縦断。西日本で総降水量1,000ミリを超える。
梅雨前線	6月2日～7月22日	九州地方を中心に大きな被害。
平成元年（1989年）		
台風第22号、前線	9月17日～9月20日	九州南部に上陸し、本州南岸を進む。太平洋側中心に大雨。
前線、低気圧	8月31日～9月16日	日本付近に前線が停滞し、西日本から中部地方で大雨による浸水被害。
台風第17号	8月25日～8月29日	四国・本州・北海道に上陸。
台風第11、12、13号	7月24日～8月7日	3個の台風が相次いで上陸・接近。
梅雨前線、台風第6号	6月8日～7月18日	梅雨前線により西日本から東日本で大雨、台風が九州縦断。

世界で年降水量が 2000 mm を超える地域と 200 mm を下回る地域はあまり広くはなく、日本はおおむね 1000～2000 mm と、比較的降水量が多い地域に該当する。年降水量が 2000 mm を超える多雨地域は、ほぼ赤道近傍に位置し、200 mm を下回る少雨地域は赤道からやや南北に離れた地域にみられる。

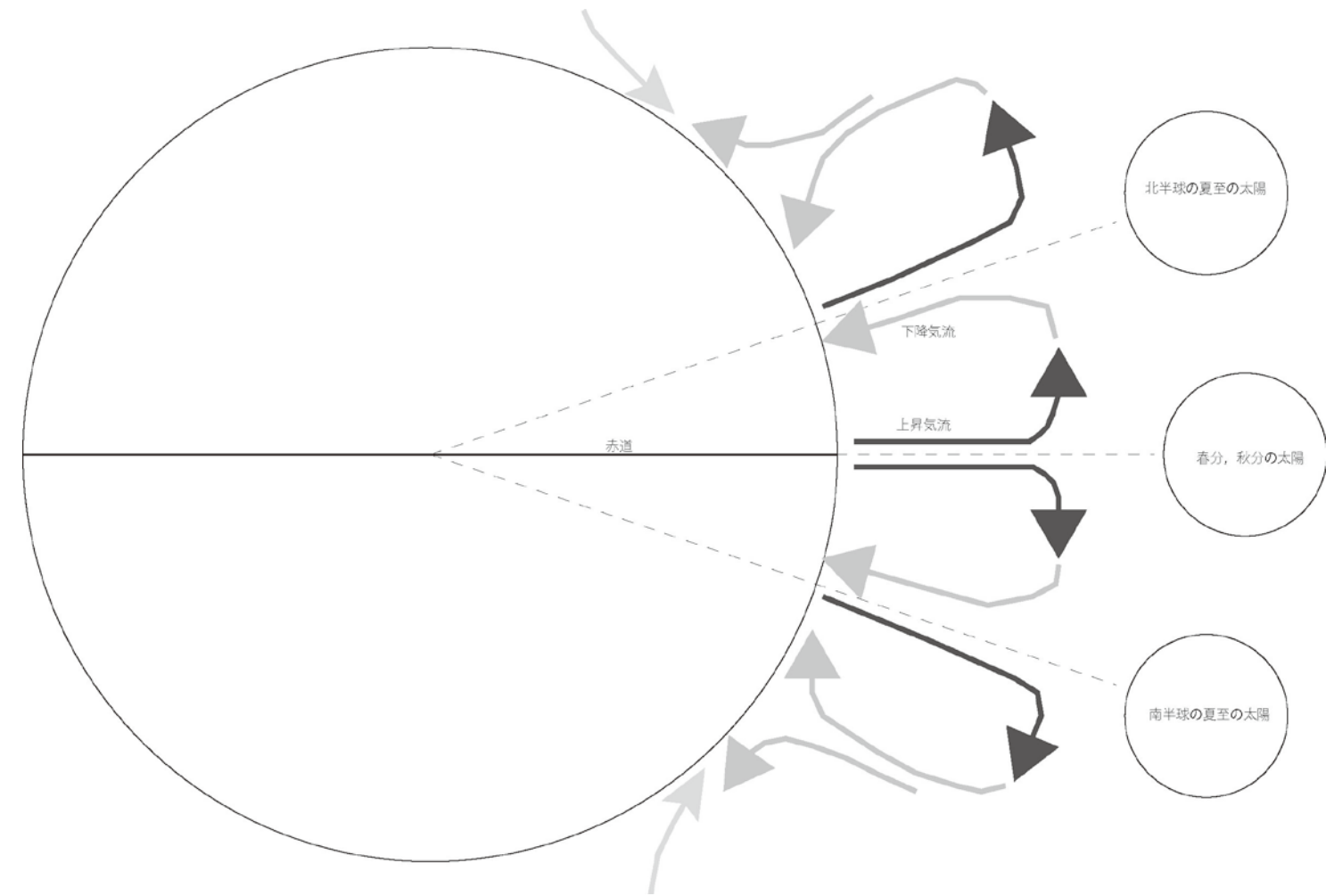


図 21 世界の水蒸気輸送の季節変化を示す模式図

太陽からの日射量は、春分および秋分の時に赤道で最大になり、北半球の夏至では北回帰線で、南半球の夏至では南回帰線で、それぞれ最大になる。太陽からの日射量が最大になる地域では、大気が最も熱せられるため、上昇気流が発生し、降雨がもたらされる。このような地域は、低圧部となり周囲から空気が流入するため、熱帯収束帯と呼ばれる。この熱帯収束帯が季節の変化にともなって北回帰線と南回帰線の間を移動し、それらの地域に降雨をもたらすため、赤道近傍では降雨が多くなる。一方、この熱帯収束帯で発生した上昇気流は、高度の上昇にともなって冷やされると、その南北に向かって下降気流となり、高圧部が生じる。この高圧部は中緯度高圧帯と呼ばれており、年間を通して中緯度高圧帯に覆われる亜熱帯地域は、少雨になりやすい。この中緯度高圧帯の暖かい空気と高緯度地域に形成される高気圧からもたらされる冷たい空気の境界には前線が形成され、降雨がもたらされる。この前線は寒帯前線と呼ばれ、日本の梅雨や秋雨はこの前線によってもたらされる。

2-3 四国の降水量分布

- ・降水量等値線図の作成

次ページの地図に、以下の手順で年降水量の等値線図を作成する。

手順

①降水量の色分け

次ページの地図中の点の横に記された降水量の値（単位は mm）を、以下のように区分して、降水量を示した数字をそれぞれの色で塗る：

1001～1500 (赤), 1501～2000 (だいたい色), 2001～2500 (黄色), 2501～3000 (水色), 3001～3500 (青), 3501～(紫)。

②等値線の記入

作業①で色分けした降水量の値を基に、等値線を記入する。等値線は、500 mm 間隔で、1500 mm, 2000 mm, 2500 mm, 3000 mm, 3500 mm の 5 種類記入する。まず、降水量の値に塗った色ごとに区分されるように、ある色と別の色の境界に線を引く。この境界線が等値線になる。境界線は、ある色と別の色とが連続する色の場合（例えば、赤とだいたい色、だいたい色と黄色、など）は、1 本であるが、連続しない色の場合は、離れた分だけ境界線の本数も増える。例えば、赤と黄色との境界線は 2 本になり、赤と水色との境界線は 3 本になる。これらの境界線は、決して他の線と交差しないようにする。等値線を描く位置は、降水量の値から比例配分して決める。たとえば 3200 mm の点と 2700 mm の点との間に 3000 mm の等値線を記入する場合は、3200 mm の点から $\frac{2}{5}$ だけ 2700 mm の点に寄ったところを 3000 mm の等値線が通るようにする。

③等値線間の色塗り

等値線がすべて描けたら、等値線の値を記入し、等値線の間を、降水量の値に塗ったのと同じ色で塗る。色が塗れたら、色の抜けがないかどうか、すなわち、赤、だいたい、黄、水色、青、紫の順にすべてのところで並んでいるかどうかを確認する。抜けがあれば間違いなのでもう一度見直す。

④等値線図の読み取り

作成した等値線図から、以下のことがらを読み取り、読み取った内容を文章にして、下の□に記す：

- ・降水量はどこで多いか？
- ・降水量はどこで少ないか？
- ・どうして、そこでは多くあるいは少なくなったのか？

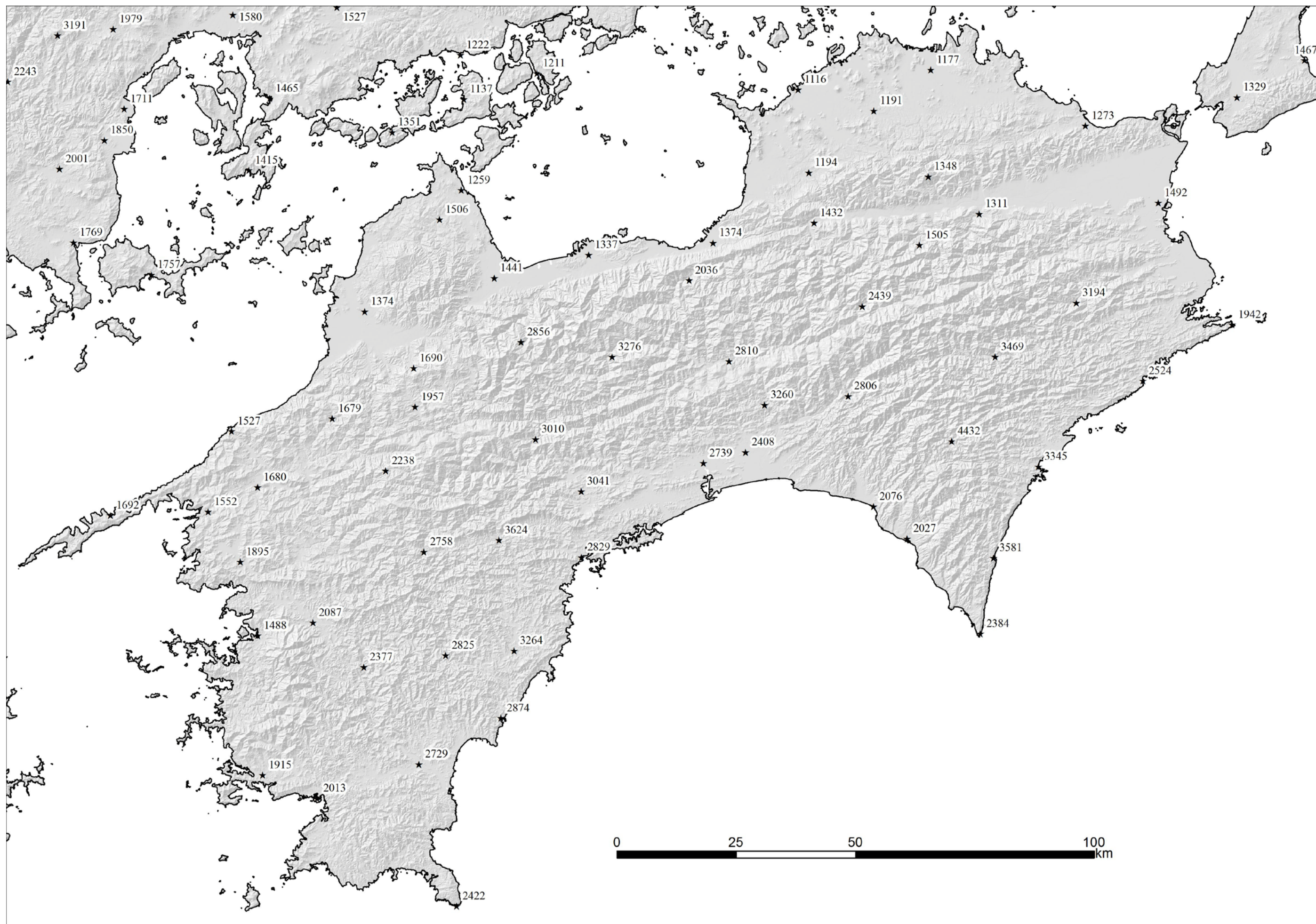


図 22 四国の年降水量の分布

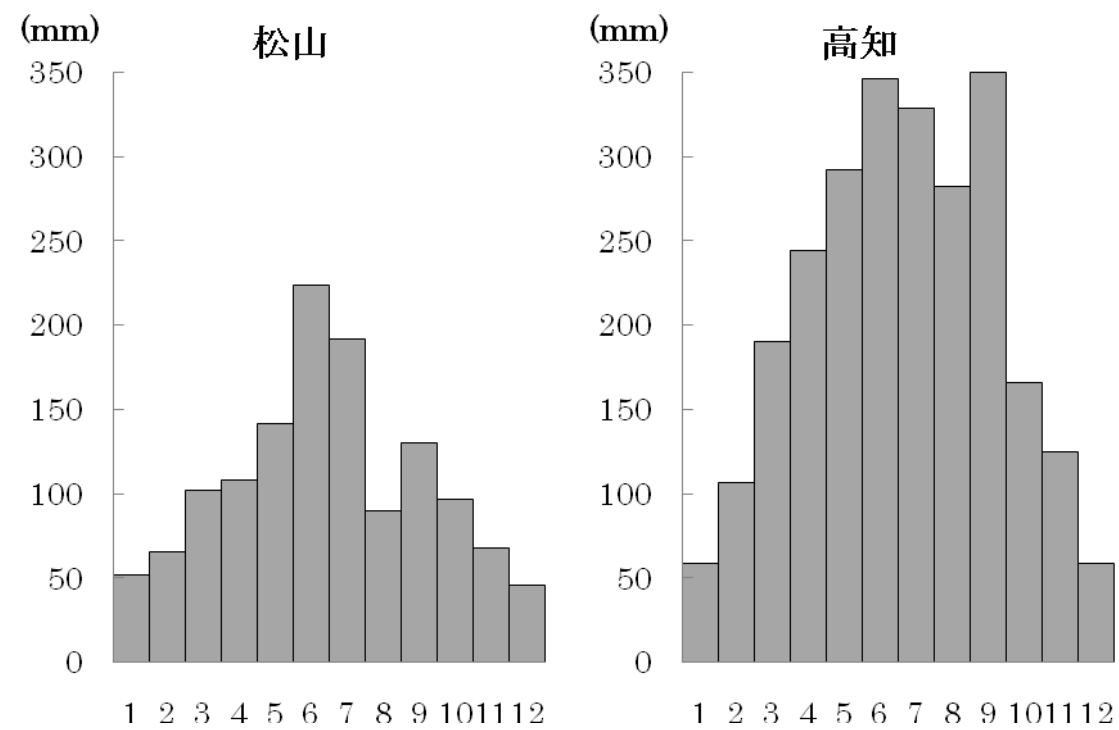


図 23 松山と高知の月別降水量

2-4 沖積平野の地形

・平野の種類

平野には、堆積平野と侵食平野とがあり、堆積平野とは、川や風、海的作用による土砂の堆積によって平坦になった土地であるのに対して、侵食平野とは、川や風、海、氷河の侵食によって平坦になった土地である。堆積平野の中でも、川による土砂の堆積で平坦になった土地は沖積平野と呼ばれ、日本の平野の多くはこの沖積平野である。侵食平野は安定大陸に分布し、世界の広大な平原の多くはこの侵食平野である。

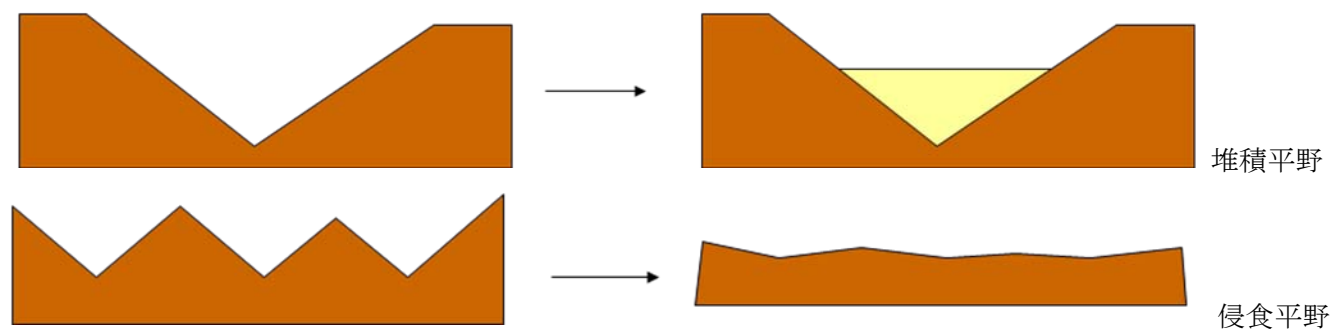


図 24 堆積平野と侵食平野の模式図

・沖積平野の地形

沖積平野の地形と堆積物は、上流から下流に向かって変化する。一般に、河川の勾配は上流から下流に向かって小さくなり、下降での勾配は0になる。これにともなう、地形や堆積物も変化する。地形は、上流から扇状地、自然堤防帯、三角州に、堆積物は、上流から礫、砂礫、砂泥へと変化する。

扇状地は、山地と平野の境界部に位置しているため、勾配が急で、大きな径の礫も土石流などによって運搬され堆積する。土砂が堆積すると、流路はより低いところに移るため、頻繁に流路が移動し、均等に土砂を堆積することによって扇型になっている。

自然堤防帯では、勾配が緩いため、流路が蛇行し、それに沿って自然堤防が形成される。蛇行のカーブが大きくな

ると、洪水時の川の流れによって直線化され、三日月湖が形成される。

三角州は河口部でほとんど勾配がないため、流路は分岐する。また、砂や、シルト、粘土といった細粒なものしかみられなくなる。

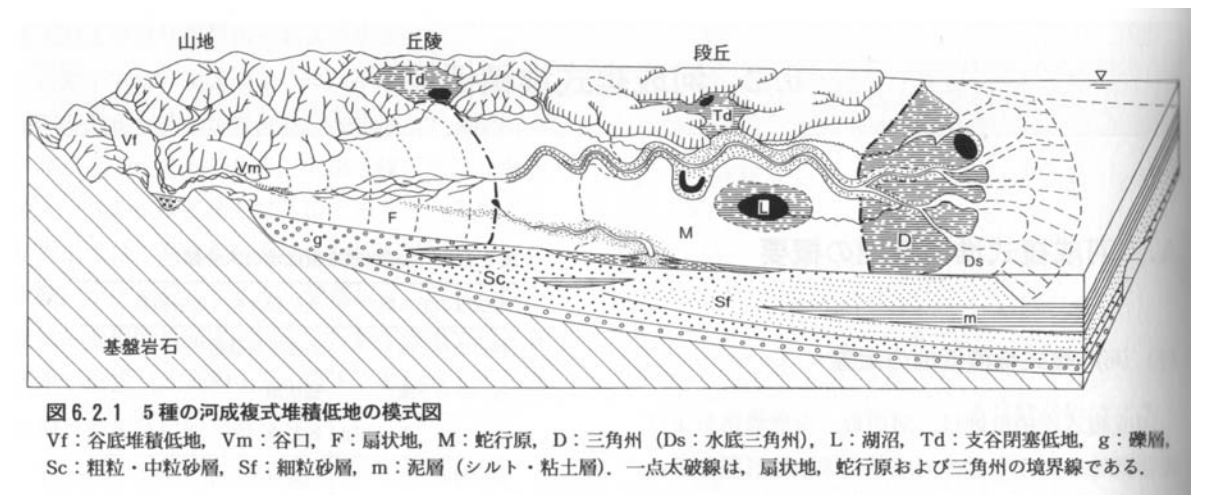


図 25 沖積平野の模式図

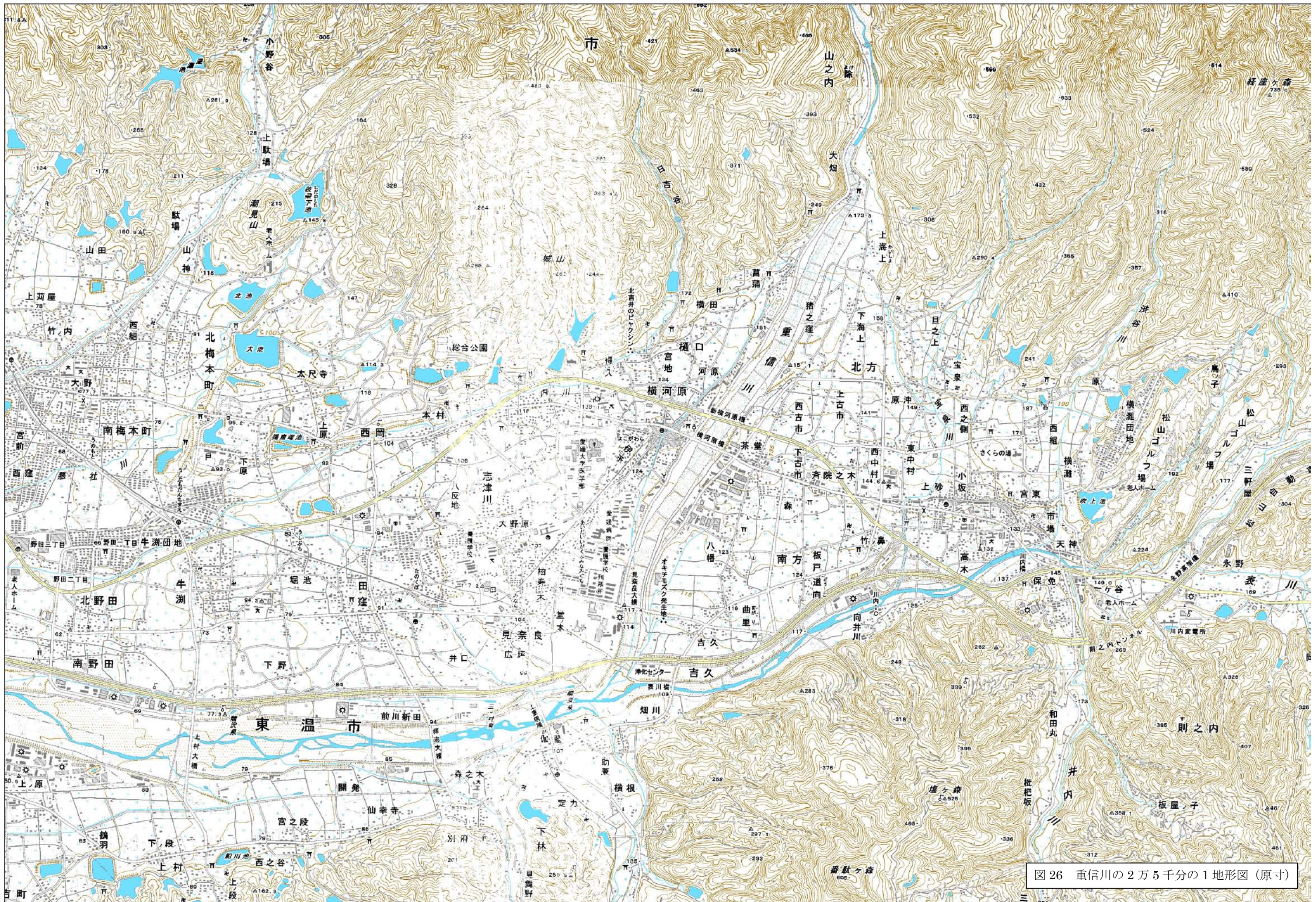


図 26 利根川の 2 万 5 千分の 1 地形図 (原寸)

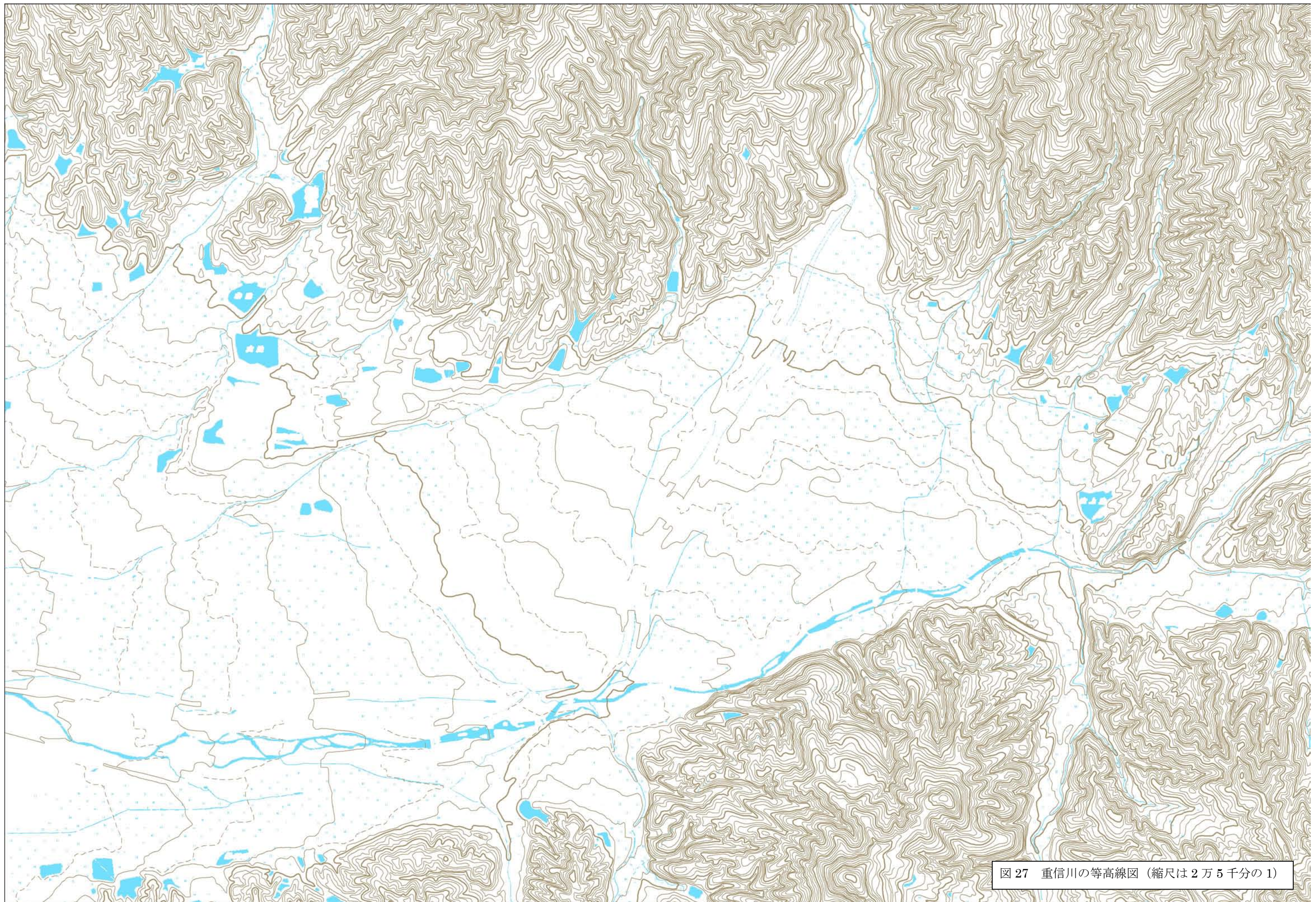
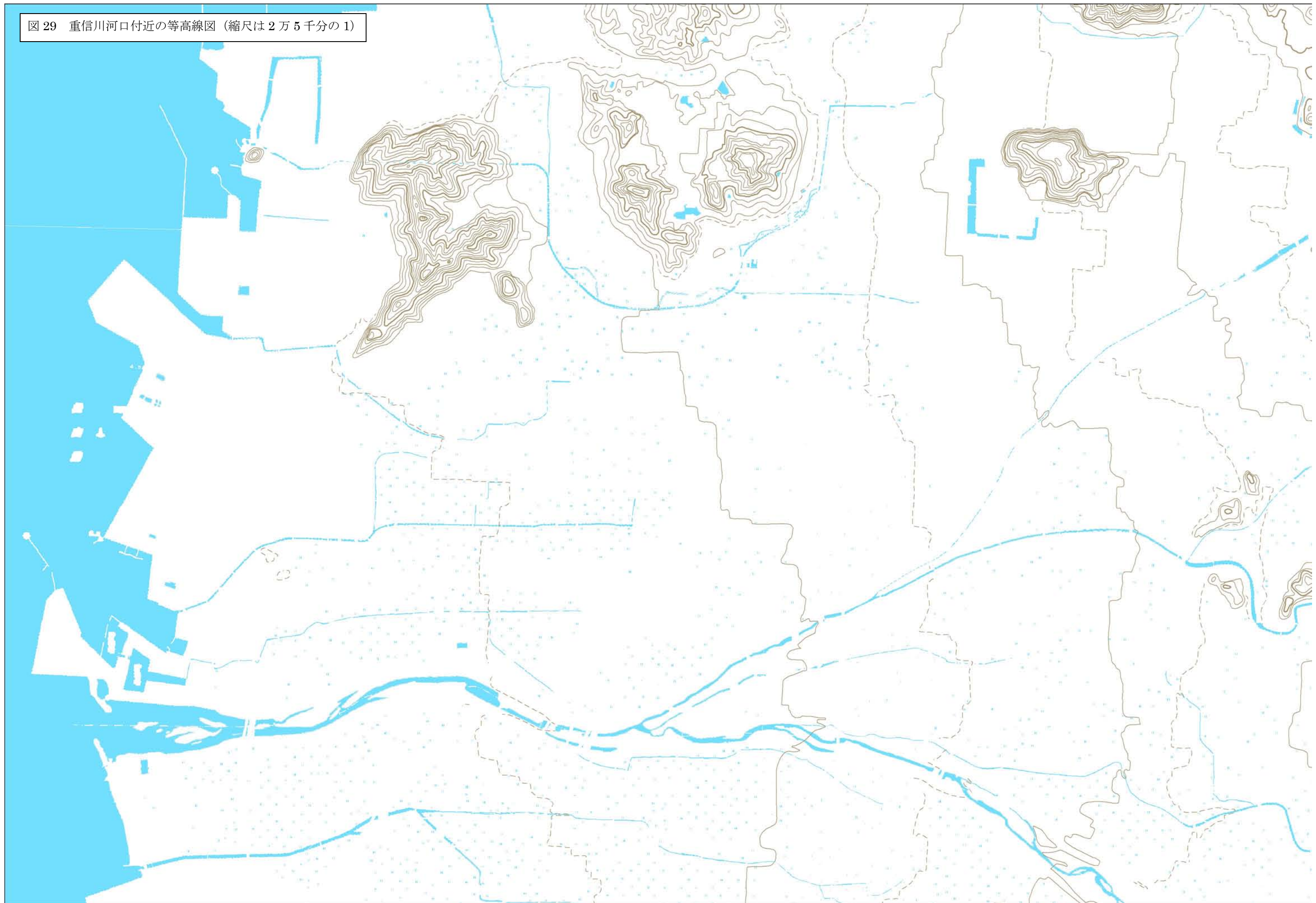


図 27 重信川の等高線図（縮尺は 2 万 5 千分の 1）

図 28 重信川河口付近の 2 万 5 千分の 1 地形図 (原寸)

図 29 重信川河口付近の等高線図（縮尺は 2 万 5 千分の 1）



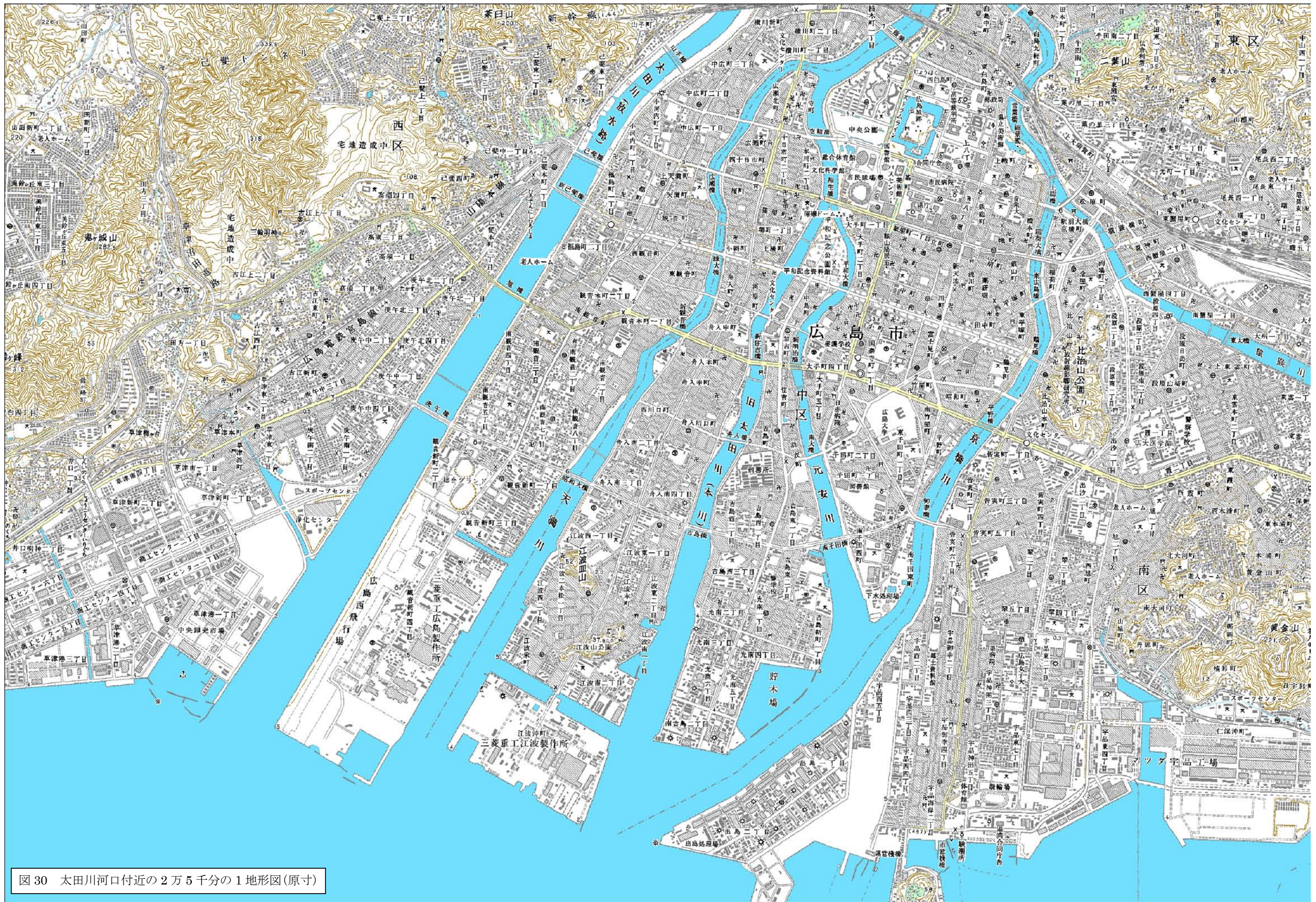


図 30 太田川河口付近の 2 万 5 千分の 1 地形図(原寸)



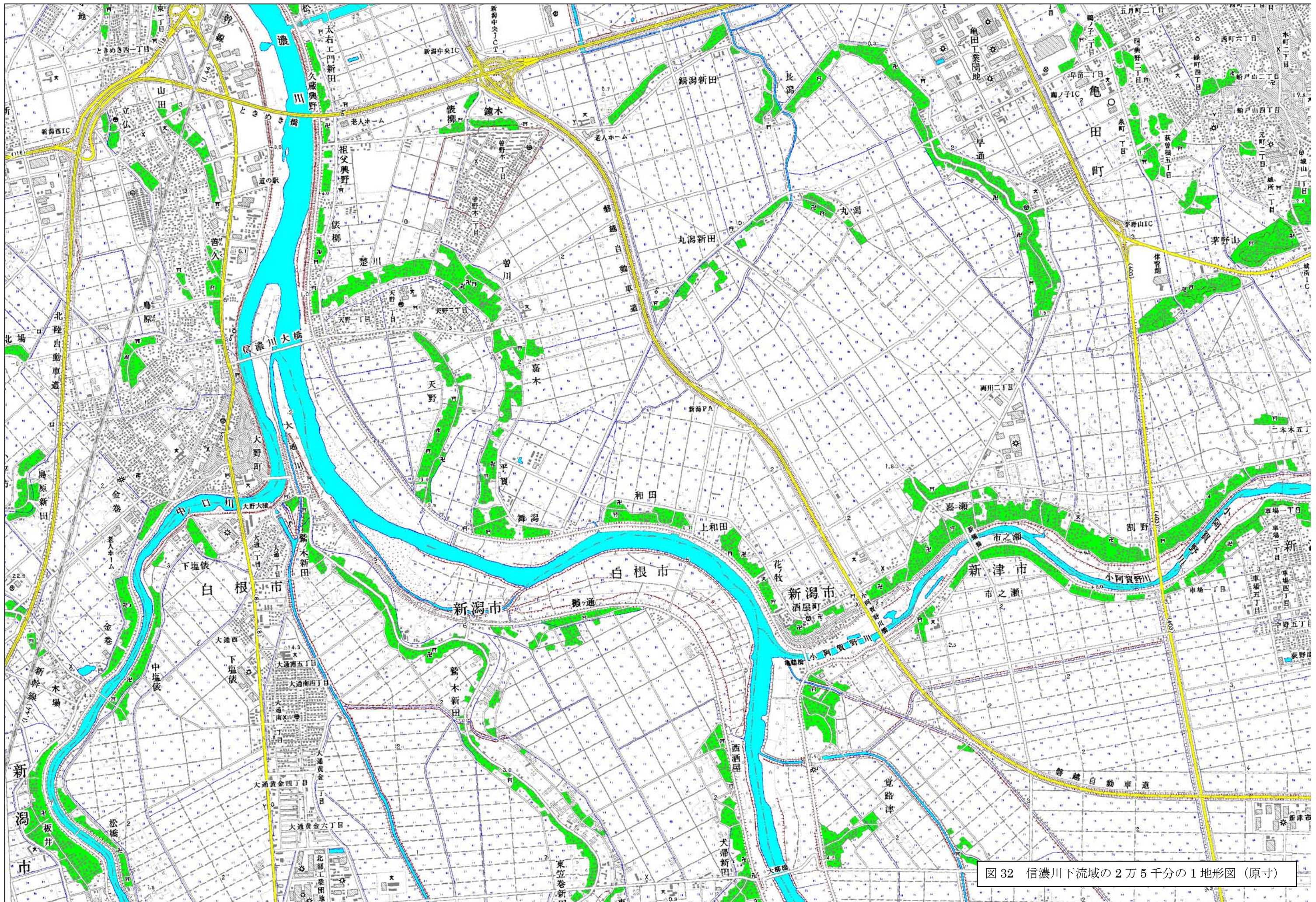


図 32 信濃川下流域の 2 万 5 千分の 1 地形図 (原寸)

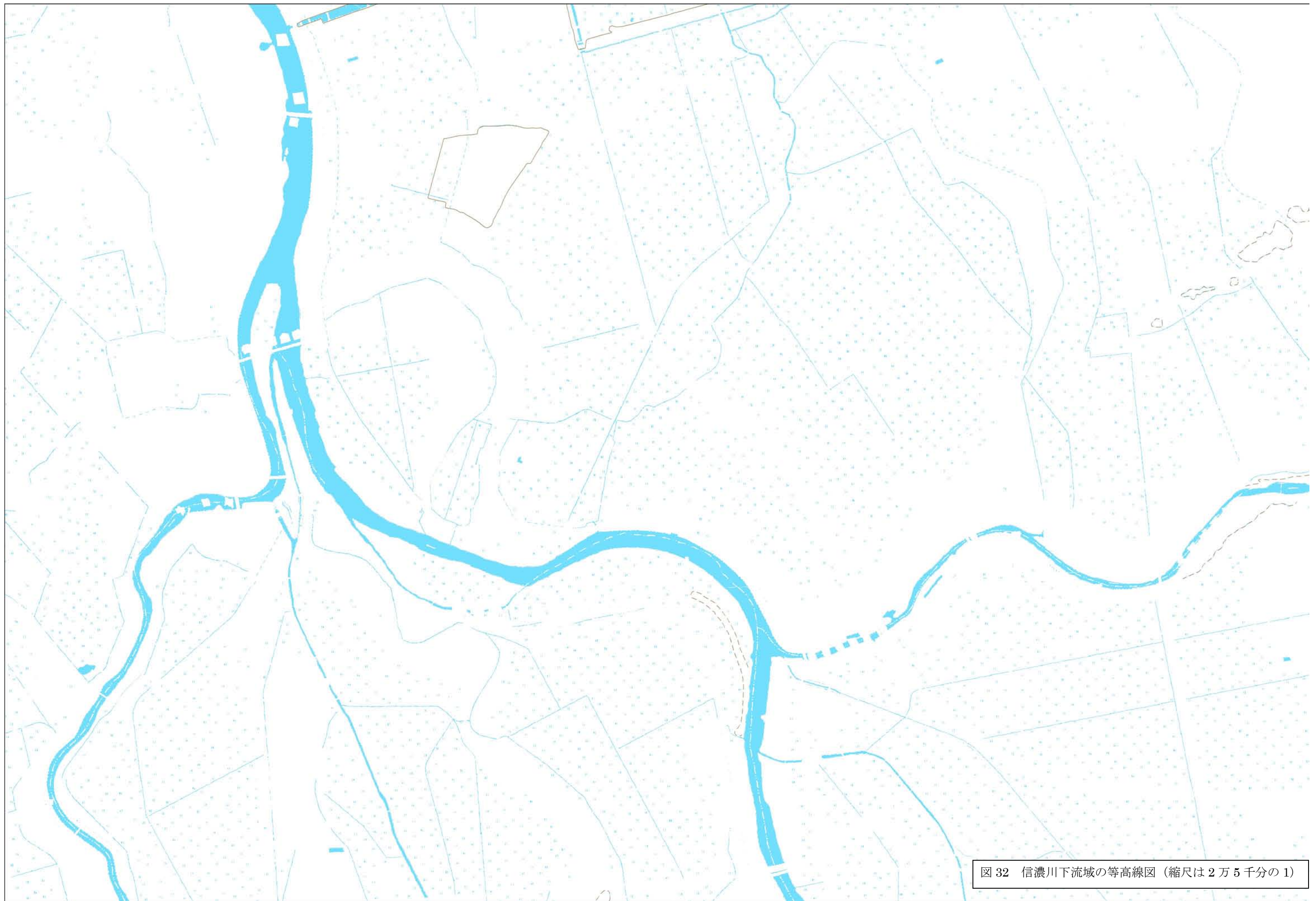


図 32 信濃川下流域の等高線図（縮尺は 2 万 5 千分の 1）

・台地と低地

低地とは、川の高さと同じくらいの高さにあり、洪水時には浸水する可能性があるところで、台地とは、 周囲よりも高くて平らなところで、一般には洪水時にも浸水することはない。台地の多くは、かつて水の底で侵食・堆積によって平らになったが、現在は水が届かない高くて平らなところになった河成段丘、海成段丘、湖成段丘などの段丘であり、段丘ではない台地は、火砕流台地、溶岩台地などの火山地形か、カルスト台地などの石灰岩地形などに限られる。三角州や自然堤防帯、扇状地のそれぞれについて、現在の流路に近い高さのものは低地であり、気候変化や地殻変動によって流路よりも高くなったものは段丘になる。

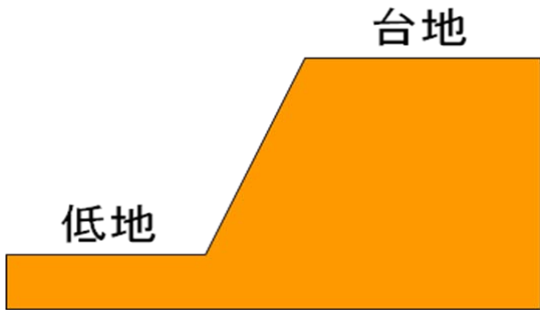


図 33 低地と台地の模式図

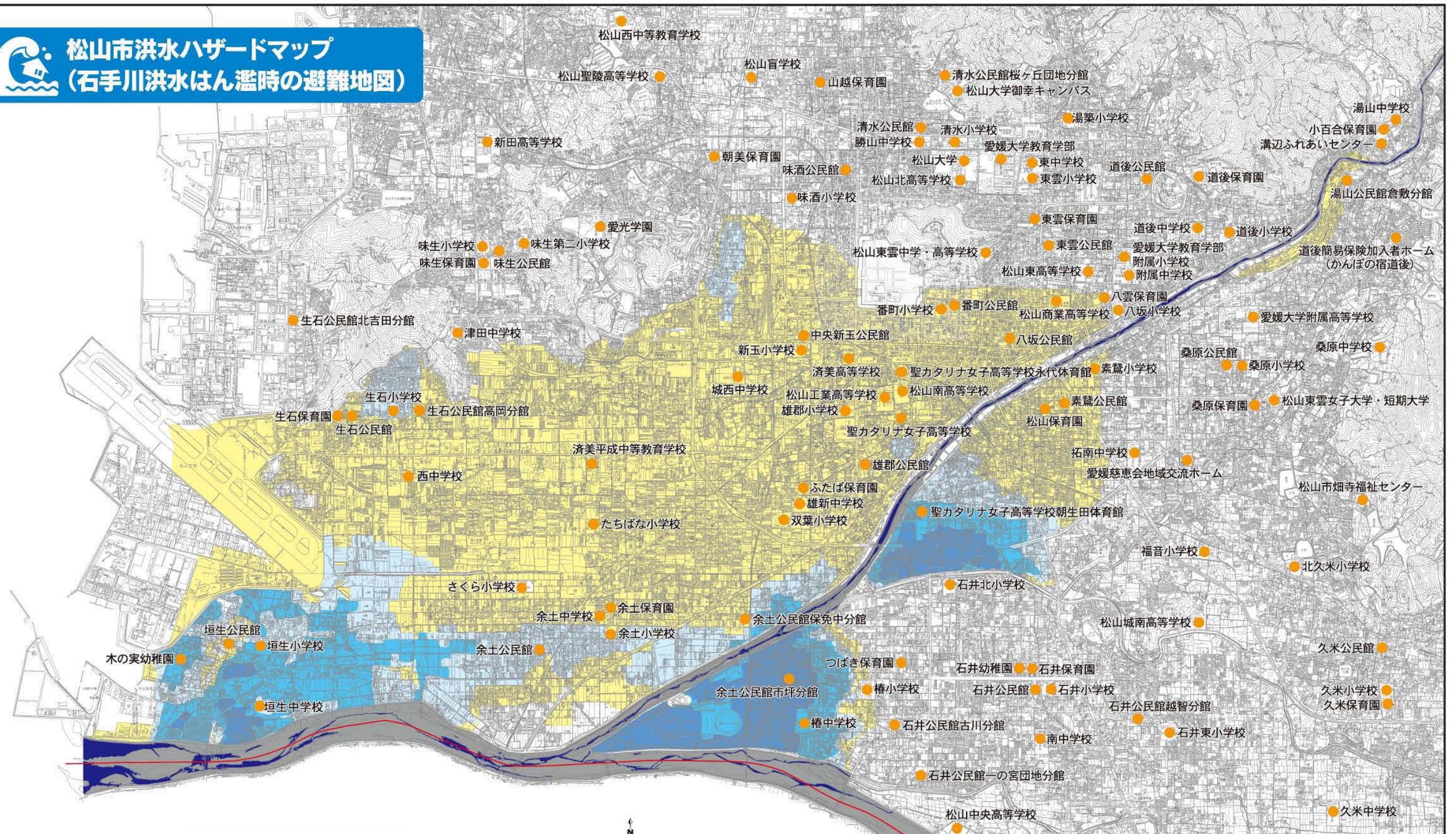
沖積平野では、洪水時に最も浸水の可能性が低いのは河成段丘であり、低地は浸水の可能性が高い。ただし、低地の中でも流路よりも高い位置にある自然堤防などは、低地の中では浸水しにくい場所である。

2-5 洪水ハザードマップ

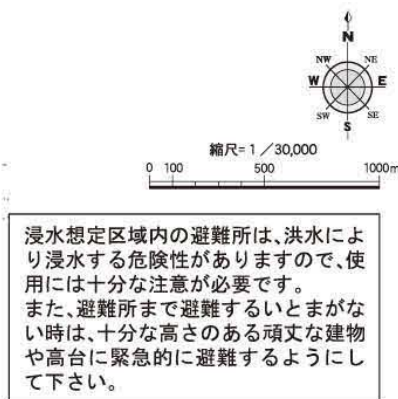
ハザードマップとは、自然災害の発生時に被害にあう可能性がある地域や避難する場所，経路などを表した地図 のことで、主に，市町村によって市町村単位で作成されている。洪水ハザードマップ，土砂災害ハザードマップ，火山ハザードマップ，地震ハザードマップ，津波ハザードマップなどのように災害の種類ごとに作成されている場合が多い。洪水ハザードマップは，2005 年に改正された水防法第 15 条に基づき，浸水想定区域を含む市町村の長は，洪水ハザードマップを作成し，各世帯に提供することになった。日本全国の市町村で公開されているハザードマップを，「国土交通省ハザードマップポータルサイト」（<http://disapotal.gsi.go.jp/index.html>）で閲覧できる。

洪水ハザードマップは，一般に大きな被害をもたらすと考えられる比較的大きな河川が氾濫した時の予想が描かれている。このような大きな川の氾濫を外水氾濫と呼び，それら大きな川へと流れ込む小河川や用水路の氾濫は内水氾濫と呼ばれる。洪水ハザードマップには，外水氾濫のみを対象としたものが多いが，内水氾濫についても予想される浸水範囲が示されているものもある。

松山市洪水ハザードマップ (石手川洪水はん濫時の避難地図)



- 凡 例**
- 浸水した場合に想定される水深（ランク別）
- 0.5m未満の区域
 - 0.5～1.0m未満の区域
 - 1.0～2.0m未満の区域
 - 2.0～5.0m未満の区域
 - 5.0m以上の区域
- 市町境界
- 河川等範囲
- 避難所



重信川水系石手川 浸水想定区域図

- もしも、大洪水で河川の堤防が壊れてしまったら、甚大な被害を受けることが予想されます。万一、洪水はん濫が発生した場合でも被害をできるだけ少なくするため、事前に河川のはん濫に関する情報を地域住民の皆様に提供し、自分の住んでいる地域の洪水はん濫による浸水被害の有無について認識を深めていただき、水防への関心を高め、緊急時の水防・避難活動などに活用していただくとともに、併せて、水害に強い生活様式への工夫にも役立てていただきたいと思います。
- (1) この図は、重信川水系石手川の水位周知区間について、水防法の規定により指定された浸水想定区域と、当該区域が浸水した場合に想定される水深その他を示したもので、国土交通省及び愛媛県が作成した資料を基に、松山市が作成しました。
 - (2) この浸水想定区域等は、指定時点の重信川水系石手川の国管理、県管理区間の河道の整備状況及び石手川ダムの洪水調整施設の状況等を勘案して、洪水防御に関する計画の基本となる降雨である昭和18年7月洪水（観測史上最大）時の大雨が降ったことにより石手川がはん濫した場合に想定される浸水の状況を、シミュレーションにより求めたものです。
 - (3) なお、このシミュレーションに当たっては、支川のはん濫、想定を超える降雨、高潮、内水によるはん濫等を考慮していませんので、この浸水想定区域に指定されていない区域においても浸水が発生する場合や、想定される水深が実際の浸水深と異なる場合があります。